

Special Essay

米軍病院での研修の思い出

脳神経外科学
重森 稔

すでに36年前のことになる。医学部の専門4年（現在の医学科6年）になった1969（昭和44）年の春、医学図書館の掲示板にある小さな張り紙が目についた。当時あった陸、海、空の3米軍病院でのextern募集に関するものである。この時代はベトナム戦争と中国での文化大革命の最盛期で、国内ではインターン廃止運動に端を発した激しい大学紛争の嵐が吹き荒れていた。インターン制度は1年前からすでに廃止されていたが卒後の研修制度は旧態依然のままであった。日頃の臨床講義や臨床実習（いわゆるポリクリ）に何となく物足りなさを感じ、卒後の進路選択にも迷っていた頃である。思わず興味をそそられ、立川空軍病院に応募したところ幸い採用となり夏休みにexternを経験することになった。

生まれて初めて上京、空軍基地のゲート前で約20名の他大学の医学生と合流した。雑然とした基地外とは別世界と思える病院に引率され翌朝から早速研修が始まった。最も驚いたのは、医学生に対する医療関係者や患者の極めて紳士的な対応とclinical clerkshipに近い充実したカリキュラム、臨床に即した具体的な教育である。ドイツ流の講義中心の縦割り教育、見学中心の臨床実習に慣らされていたため今までにない新鮮味を覚えた。Current Diagnosis and Treatment (Brainerd, Margen, Chatton)、Harrison内科学、Christopher外科学などに多少は親しんでいたが、米国医学と医療の実際を知る貴重な機会となった。研修の合間には基地内のクラブで米国人同様に食事や音楽、スポーツも楽しめ国力の差を痛感したものである。この体験から、卒後はこの病院でinternをすると決心し秋から始まる卒業試験の合間を縫って受験した。翌年1月に合格証を手にしたときの嬉しさを今でも懐かしく思い出す。ところがその後の事情で結局internは断念することになってしまった。この時の決断次第ではその後の進路は全く違ったものになったであろう。毎年夏になると時折この時のことを思い出し、人生における岐路や転機というものの不可思議を感じるのである。